

中国村落の演劇集団の組織と活動 (注1)

佐々木 衛

1. はじめに - 村落の演劇

H. スミスは『支那の村落生活』(〔1899、1968〕1941)の中で、村で興行される演劇が村人を熱狂させる情景を生き生きと伝えている。「ある村落が劇団を招いたということが分かるや否や、近隣一帯の村落は興奮の坩堝に投げ込まれたようになる。新婚婦人の里帰り——母親にとっても娘にとっても特別重要な務め——はずっと前からこの大事件と結びつけて準備される。近隣村落のすべての学校は、かかる場合、芝居の全継続期間中休暇を期待する」(1941: 66)。「劇団を招聘した村落では、各家庭はお客で一杯で、夜は横になる場所もなく、従って、一晩中坐って話をしていなければならぬことが珍しくない」(67)。「かくの如く大勢の訪問者に御馳走する費用は非常に大きい。…(中略)…饗応費が芝居そのものの費用の十倍もかかるというのは決して過大な評価ではない。金のかかるのは馬ではなくて、鞍であるという格言そのままである」(68)。興奮の中に芝居が終わったあとには、寂寥を強くした日常に戻る。「芝居が終わると、村落には鶏の影さえ見えなくなると普通いわれている。鶏専門の盗人に盗まれるのを防止するために、村人は予め鶏を処分してしまわなければならない」(68)。

芝居が中国民衆の心を引き付ける理由を、スミスは次のようにみている。民衆によく知られた歴史的事件が、俗受けするよう脚色され劇に仕立て上げられる。しかし、民衆の拍手をうけるこの脚色は、中国民衆が堅く信じている生活原理を表わすことになる。「真意は『お前はおれを辱めた。しかし、俺はお前を恐れない。お前が俺には問題ならぬということをお前さんの前に見せてやる』というのである」(73)。役者が観客を前に、彼らの意中を演じて見せるのは、すなわち「面子を立てる」ことなのだという(73)。

スミスが描いた芝居への民衆の熱狂、演じられる「人生舞台」、差別される役者、寂寥とした日常をならべると、祝祭、カーニバル、シャリヴァリといった文化人類学でおなじみの「社会劇」(Turnor, [1974]1981)の概念に魅惑される。しかし、本稿ではこうした「文化の解釈」ではなく、芝居を演じた人々、組織者たちの姿を具体的な事例として描くのが目的である。

田中一成は、中国の演劇を組織者としての宗族の政治的力との関係から分析した(1985)。香港新界からの資料によると、「墟市」(市場)の支配と社会的威信をかけて、宗族は祭祀演劇を挙げる。従って、演劇を組織する担い手には、宗族間、そして宗族集団と商人との勢力関係が反映されている。中小宗族からなる村落神祇の場合でも、宗族や宗族連合が各々の社会勢力を体現するモニュメントとして機能することにかわりない(瀬川、1991:229)。村落神祇で演劇が挙行されれば、その担い手には中小宗族間の勢力関係が反映されているにちがいない(瀬川、1991:117)。

華北社会を香港新界や南東中国と比べてみると、宗族集団と村落の基本的な構造には差はなくとも、その凝集力、あるいは機能の面では、華北の宗族集団と村落は姿を明確にすることが少ないといえよう(佐々木、1990)。近代の村落の活動は、有力者たちの暗黙の合意の上に組織されるといえそうである(久保田、1992)。宗族や村落への求心力を弱めた華北の村落社会では、演劇の組織やその担い手の存在は、香港新界や東南中国社会とは異なった様相を持つと考えられる。スミスが紹介した、近隣一帯の村落さえも興奮の坩堝に投げ込まれたようになる演劇は、華北村落ではどの様に組織されたのであろうか。また、演劇の主役たちは村の中でどの様な存在であったのであろうか。こうした具体的な事実は、華北社会の基本構造を検討する上で、貴重な示唆を与えてくれると考える。

2. 『中国農村慣行調査』の事例

『中国農村慣行調査』全6巻(中国農村慣行調査刊行会編、1952-1958)の記事の中から芝居や演劇に関連した箇所を整理すると、芝居に関する記事11例、

娯楽に関する記事2例であった。この外に、廟会、祖先祭祀、年中行事（正月、清明節、七夕、中秋、鬼節、雨ごい）、その他のもろもろの「会」では祭祀と一体となった娯楽の機会が提供され、踊りや武術の上演が組織されたことであろう。しかしここでは、記事として記載された事例に対象を限定して検討する。

＜芝居＞

- (1) 河北省順義県沙井村（巻1：130-131）：昔は廟会の時、晩に読書的（講談）をやり、また開光（落成式）の時には華やかな芝居をした。
- (2) 河北省順義県蕭家坡（巻1：191）：（謝会の時の芝居）事変後はない。雨乞いで雨の降った時は芝居をする。豊年の時にも芝居あり。芝居をする時には北京から役者を呼ぶので大変金がかかる。
- (3) 河北省順義県河南村（巻1：193）：廟の内に娘々を祭る天仙宮がある。正月9日の廟会の日には芝居があり、全村民の楽しみであった。現在は芝居はなくなった。
- (4) 河北省樂城県寺北柴村（巻3：32、42-43、65）：10月15日は観音に焼香する。民国15年頃は芸人を雇って村中で看劇をやったが、近年は不況で行われぬ。
- (5) 山東省恩県後夏寨（巻4：410、416）：三三社（真武廟の祭祀）では、民国15年頃までは演劇をした。済南から恩県に移ぎにきている劇班子を雇ってきた。費用は二百圓位かかった。費用は本村のみの攤派（世帯割り）で出した。
- (6) 河北省良郷県呉店村（巻5：411）：龍王に雨が降れば芝居をすると誓う。昔でも百圓はかかった。今なら一千圓はかかる。最近芝居をしたことなし。
- (7) 河北省安次県祖各庄・東王莊（巻6：86）：本村には芝居はないが、楊稅務にあったときには、長工を見に行かせた。（楊稅務では）読書的（講談師）が来て廟の空き家でやった。
- (8) 河北省邢台県東汪村（巻6：120）：廟会ではしないが、収穫の非常に良いときに芝居をやることはある。
- (9) 河北省涿県塢頭鎮（巻6：126-127）：十里保では3月1日に船会が劉老

爺廟（劉守真を祀る）で芝居をして劉爺に見せ、人々も沢山集まった。これを「河船戲」といった。船戸は船会に入会する。船会の香頭は船戲をするときの中心人物となる。

- (10) 河北省天津県小站郷（巻6：193）：昔は商會が芝居をした。
- (11) 河北省邢台県孔橋村（巻6：257）：9村が河口社を組織して河川を管理している。雨乞いをして雨が降ったら芝居をした。しかし、河口社が責任を持ってしたのではない。

<娯楽>

- (1) 河北省昌黎県侯家營（巻5：33）：太平歌を正月に行う。村民から金を集め、音楽隊を雇い、村の男がいろいろの仮装をして踊る。鼓會=香火會に関連する會。10月15日に昌黎の北山水岩寺にお詣りする前の2日間と、5月5日の橋上の龍王廟にお詣りする前の2日間に行われる。村の街上で旗を10名ないし20名の村の子どもにもたせ、その前で銅鑼・太鼓などをならし、村で踊りの上手なものが踊る。
- (2) 河北省良郷県吳店村（巻5：427-8）：高躺會は正月に城内に行って踊るため、年若い愛好者の作った會。少林會は武術愛好者の會。新年15日に燈を出す時に拳をやる。

以上の記事から読み取れることを整理してみよう。まず、村の中で祀る廟會、雨乞いの感謝、あるいは正月などに、芝居を興行したことがわかる。河北省樂城縣寺北柴村や山東恩縣後夏寨は、都會から離れた比較的貧しい村落と見なされているが（DUARA, 1988：14）、こうした寒村でも、芸人を雇ったり、戲の一座を招いて芝居を興行したのに注目されよう。芝居の挙行は村人に大変な負担を強いるにちがいないが、しかし貧しい村でも可能で、一般的にみられたことであった。

興行の担い手は、これらの記事だけでは明確にならない。船戸が加入した船會（事例9）、あるいは商人の商會（事例10）、河川の管理をする9ヶ村の河口社（事例11）など、一つの村落を越えた集團によって組織されることも少なくないようだ。河口社の龍王廟の祭祀では、水資源をめぐる村落間の対立と連帯

が、その担い手集団の組織に姿を現わす (DUARA, 1988 : 26 - 38)。しかし廟会の祭祀、とりわけ芝居を興行するなどの多額の費用を必要とする場合は、「会首」、「香頭」などと呼ばれた組織者が必要であったようだ。寺北柴村を例にあげれば、廟の管理をするものとして会首を選んだが、「会首は仏の保護を受けるので、会首になるとその人の畑は豊作になる。だから村民は皆争って会首になりたがった」(3巻 : 43)。そこで籤をつくって1人の会首を選んだ、と報告されている。会首は廟の世話ばかりでなく祭祀の準備をしたが、しかし芝居を挙行するのはこの会首ではない。雨乞いと芝居の事例が記載されている(3巻 : 65 - 66)。これによると、井戸の便が悪く降雨を祈願する3人が申し出て、廟の会首や村長などと相談して、雨乞いと芝居を組織した。村民は皆雨がほしいので3人がいい出したら反対する者はいなかった、ということである。彼ら3人も会首と呼ばれていた。会首の呼称は、必ずしも制度としての役職に応じたものではないことが明らかにされている(内山、1990)。村の行政を担う「公会」を初め、廟会、あるいは宗族組織の父子会や寒食会、そして宗教集団や娯楽集団の「会」の主唱者にも、一般的に会首の呼称が用いられている。廟の祭祀などの人が集まるのを「会」と呼び(3巻 : 43)、会首が資金を初め準備万端を取り仕切ったことがうかがえる。とりわけ多額の資金を要する演劇の挙行には、音頭をとって人々を組織するだけの実力を持った「会首」、「香頭」の存在は欠かすことが出来ない。

さきに整理した資料は、次のことも明らかにしている。村人が年中行事となっていた正月や廟会の機会に、銅鑼や太鼓を鳴らし、踊りの上手な者が踊ったり、あるいは高躰会や少林会が演じたりする農民の一般的な娯楽を除いて、大がかりな芝居は調査時の1940年代にはすでに行われなくなっている。村の芝居ばかりでなく、いくつかの村が連合して組織していたもの(事例3、事例11)、商会や船会が組織した芝居まで取りやめられてすでに久しくなっている。こうした規模の大きな芝居にはそれに見合う有力な会首がいたと考えられるのだが、彼らが芝居に資力を使うことに魅力を持たなくなったという、1920年代から30年代には大きな社会の変化があったと考えざるを得ない。「昔は城内の廟会の

時に芝居があったが、今は治安と金の問題でなくなった」(1巻:191)という。祭祀演劇を今日まで継承してきた香港新界に比べると、華北地域は伝統的な社会構造を1940年代以前の早くから溶解させていたことがうかがえよう。

3. 『近代中国の社会と民衆文化』の事例

宗教集団が強い凝集力を持ち、社会生活の中で骨格となっていた地域では、芝居の興行は宗教集団の社会的威信を誇示する機会として重要な機能を果たしていたにちがいない。しかし宗族集団に頼れる力を望めない華北地域では、芝居の挙行や演劇集団の上演は香港新界などと異なった様相を現わす。まず村の中に組織された演劇集団の活動と参加者に関する具体的な事例を紹介し、その性格を検討しよう。

上記の資料集に収められた事例は、2地区からなる。一つは、北京市房山区大柴塢郷元武屯、二つは、北京市房山区大柴塢郷肖庄である。両者は良郷県城にも近い房山区大柴塢郷に属し、500メートルしか離れていない。北京に通じる街道筋に位置するとはいえ、今日においても村落社会の性格をもつ村である。

(1) 北京市房山区大柴塢郷元武屯の銅鑼会

本村は、北京市から南西に40数キロのところに位置し、良郷県城に数キロしか離れていない。華北地区の村落の中では、比較的住みやすい所とされてきた。

本村には、明代に創建されたと伝えられる天仙宮(娘娘廟)がある。かつては廟地が50畝もあり、毎年4月18日に催された廟会には、周囲4、5キロの村々から人々がやってきて香を焚き、盛大であったといわれている。廟会では河北省新城県白溝河から本式の劇団を招いて芝居を上演することもあった。新城県は貧しい地方で、村々を回って演じたどさ回りの大根役者を排出した地区であった。良郷の付近には、旅役者が4、5人はいたであろうといわれる。彼らはいづもは各村に分散して住んでいたが、芝居を上演する村があれば、互いに連絡をとって芝居を興業した。数日間の芝居が終わると、彼らはまた散りじりになり、村から村に流れていってその日暮らしの金を稼いだのであった(佐々木衛編、1992:244-255)。

本村で銅鑼会が組織されたのは、民国10数年の頃とされている。当時、本村には煉瓦を焼く窯が村のはずれにあった。若い頃に役者としての経験をもって老劉と呼ばれた男が、この窯に臨時に雇われて住み着いたことがあった。冬は窯の周囲が温かく、青年がたむろする場所ともなっていた。彼らが芝居の台詞や歌を自流に唱っているのを聞いて、彼らの手ほどきをする事になったのが、銅鑼会を組織する発端となったのである（佐々木衛編、1992：248-249）。老劉も新城県出身の旅回りの役者であったが、本村にたどり着いたときは5、60歳になっており、もはや舞台に立つことができなくなっていたといわれている（佐々木衛編、1992：250-251）。

老劉の申し出を受けて、村に住ませたのは当時の村正の陳世昌であった。その年の春になって窯の仕事が終わったのち、老劉は灯花会の会首の一人、王玉家の一室に住むことになった。老劉に芝居の一節を学んだ青年たちは、20数人にもなった。彼らはいくらかの銭や食料を老劉に渡して村に落ち着かせ、また銅鑼、鼓、釵、胡琴など芝居を演じるのに必要な道具を買って備えた。しかし芝居で演じる女形の「楊柳腰」は、皆の冷かしのを大いに誘って、練習するものがいなくなった。こうして、本村での芝居の練習は、所作を伴わない歌だけになって、彼らの演じるのは「坐腔劇」と呼ばれる芝居の一節を唱うだけのものになった（佐々木衛編、1992：248-249）。それでも村では娯楽が少ないので、村人の関心を集め、農閑期には村人の楽しみとなったのである（佐々木衛編、1992：255）。

銅鑼会が演じたのは、元宵節の灯花会のときであった。付近一帯の村では正月15日の元宵節に、「散灯花」をする風習がある。免災散災を祈願し、病気や災いから身を守ってくれるように仏に加護を祈る。簿紙を切って灯心を作り、胡麻油に浸して火を着け、家の隅々に置いてまわる。散灯花は各家庭で行うものであったが、苗林、蘇斌、王玉の三人が会首となって寄付を募り天仙宮での散灯花を準備した。村の各家をまわって寄付を集めた金で、綿花と麻の茎、胡麻油を買って来て灯花をつくった。外に、灯籠と呼ばれた大きな丸い灯心もつくった。まず鉄の綱で棚を造り、これに油を染み込ませた布を巻き付ける。こ

の上に灯籠を置いて火をつけると、火に熱せられた灯籠は上に昇ってゆき、まるで大きな星が輝いているように見えたという。灯花会の行った散灯花は、天仙宮に集まって出発し、村正と村副の先導で村の三官廟と南の端にあった五道廟をまわり、村中の辻々に灯花を置いて天仙宮に帰ってきた。この日はかりは村中が灯花で輝き、一条の路もまるで一匹の龍の様であったという。この散灯花をしてまわる村人の先頭になって楽器を鳴らしたのが銅鑼会であったという。爆竹が大きな音を立ててはじけ、銅鑼会の銅鑼と太鼓が鳴るので、散灯花の行列はたいへん賑やかになったといわれている。また15日の昼には、各家で元霄（丸い団子）をゆでて娘に捧げた。天仙宮でも会首によって元霄が準備されていて、天仙宮や他の廟に献納したほか、天仙宮に詣でた村人に振舞われたということである（佐々木衛編、1992：244-245）。

銅鑼会は、本村の外で演じることもあった。本村から4キロ離れた小董村では、元霄節に廟会が催され、周辺地域の村々から品物が集まり市も開かれた。七・七事変（1937年）の前のまだ平穏な時代には、走会が組織されたという。各村で組織された銅鑼会をはじめ、跑旱船、高躰会、少林会、櫓会、龍灯会などが一同に集まり、互いの技量を競った。余りの賑わいに、会同士が抗争を引き起こすこともあった。なかには刀や銃を弄ぶものもいて、けが人や死者を出すこともあったという。こうした事態を取り仕切ったのが小董村で組織された理服会で、走会を準備したのも彼らであった。元武屯の銅鑼会も、小董村の理服会の招きで走会に参加し、銅鑼と太鼓を先頭に、村人がこぞって出かけたといわれている（佐々木衛編、1992：249-250）。

灯花会の会首となった苗林、蘇斌、王玉、そして銅鑼会に参加した20数人の青年はどんな人達であったのであろうか。彼らのプロフィールを見てみよう。

苗林は、父の代に本村にやってきた。苗林は戌年生まれなので、現在生きておれば百歳になっているはずだという。息子が一人いたが、家には2、3畝の土地しかなく、左官の手伝いなど雑業をして生計をたてる貧しい家庭だった。妻は天仙廟の和尚のひとり郷林と駆け落ちをして、村を出てしまった。1920年代、妻が40歳頃のことであった。この事件に前後して、息子の苗虎も村を出て、

行方が分からなくなった（佐々木衛編、1992：236）。

蘇斌の父の世代は4人兄弟で、彼らの世代が家を分けるとき5、60畝の土地があった。父は10数畝の土地を分与されたが、蘇斌の3人兄弟が家を分けるときには数畝しか残っていなかった。一族の中には土地を増やし燕京大学の卒業生をもつ家族もあったが、蘇斌の家族は最も零落した階層に入れられる。まして彼は遊んでまわって働くことをしなかったので、彼に残された土地もすっかり売られてしまった。全てを失った後、肖庄の李小海に喇叭を習い、冠婚葬祭のときには招かれてその謝礼で生計をたてた（佐々木衛編、1992：246-248）。

王玉は、当時間長の役をつとめていた。村正の陳世昌が招いた役者の老劉を住ませたのは、彼であった。家には10数畝の土地があり、父は大工であった。王玉も大工として父について仕事をしたが、二把刀（二流）の腕前しかなかったといわれている。彼は、人の世話をよくやき、人との間を取りもつ労を好んでとった、と村人から評価される。村人は、こうした人を「善人」と呼んでいる（佐々木衛編、1992：246）。

以上の灯花会の会首のうち、蘇斌と王玉は銅鑼会にも参加した。銅鑼会には20数人の若者が参加したということであったが、彼らの外に、銅鑼会に参加したもので確認できたのは次の人々であった（佐々木衛編、1992：251-255）。

李魁元、李魁恒の兄弟：彼らは李桂馨の3人息子の2人である。李桂馨は村正をつとめたことがあり、銅鑼会の設立当時には村副をしていた。家には140から150畝の土地があり、馬、ラバ、ロバの家畜をはじめ、大荷車を所有していたので、農業だけで生計をたてることができた数少ない農家の一戸であった。李魁元が長男、李魁恒が次男である。銅鑼会が組織された当時、李魁元はすでに20歳を過ぎていた。彼は10歳過ぎから天仙宮の和尚について本を学び、頭がよく、声も良かった。李魁恒は、私塾で学んだ。会では横笛を吹いた。

蘇漢忠：蘇斌の侄で、蘇和の長男である。蘇和の家も蘇斌と同様に貧しく、土地はわずかししか残されていない。弟の蘇小疤瘡は村を出てしまっていた。字を習ったことはなく、劇の脚本は読めなかった。女形を演じたが、歌の歌詞を一句ずつ老劉から口で教えてもらった。

田玉海：父は田望といった。父の世代が家を分けるとき、10数畝を均分したので、わずかな土地しかなかった。後にこの土地も売ったので、数間のあばら屋と敷地しか残っていなかった。良郷の魏家の土地を20数畝小作をした。彼も読める字はほとんどなかった。女形を演じたが1、2の題目が演じられるだけであった。

周河：父は周永財という。4人兄弟の次男であった。寅年で、銅鑼会に参加した当時は20歳前後で、すでに結婚していた。父の周永財は、かつては村長をしたことがあり、元来数十畝の土地を所有していたが、大きなことをいい触らしたために、土地を売らざるを得なくなり、10畝ばかりの土地が残っただけであった。周河もいくつかの字を知っているだけであった。

孟紀栄：家の敷地の外には土地がなく、2畝の墓地を耕すだけであった。まったくの素寒貧になっており、結婚もできなかった。

李和：李和の父は李徳福といった。あだ名を李大黒といった。豚の屠殺業を営んだ。看青（穀物の収穫時期に雇われる見張り役）をしたこともある。家には財産はまったくなく、土地さえなかった。李和には兄がいたが、2人とも結婚できなかった。また、彼は日本軍が占領した時代の「地方」（村の使い走り）をしたこともある。短工として雇われたりもしたが、主な仕事は雑用であった。彼も読み書きができなかった。

劉文銘：父を劉永順という。弟が劉文清。劉文銘は、銅鑼会が組織されて2、3年の後に参加した。20歳前後のことであったが、まだ結婚をしていなかった。家には22畝の土地があった。彼は私塾で1年間学んだが、「人欠養嬌」（子供が少ないと甘やかして育てられる）で、遊び人であった。読み書きが一通り出来たので、劇の台本を読めた。

陳世尊：陳喜の次男。陳喜には土地がなく、北京に移住した黄家の墓地を管理していた。墓地は5畝あり、この管理の代償に空き地を耕させてもらった。外に、良郷の魏家の土地を小作した。陳世尊は後に保長をつとめたことがある。誰も保長になりたがらなかったからだ。銅鑼会では、大羅をたたき、女形を演じた。

李清江：父は李制という。財産はなく、2間半の家に住んだ。兄弟2人であったが、2人とも他家の養子となった。彼は、銅鑼会が組織できる以前から「地方」をしていた。10数年間も「地方」をやっていたといわれている。俗に「地方地方、各管各庄、麦秋斂麦子、大秋斂高粱」（地方はそれぞれ自分の村を縄張りとし、麦秋には麦を、秋の収穫時には高粱を取り立てる）といった。彼には土地がなかったので、地方をして何とか生活をしていったということであった。

殷鳳山：彼は左官職人の頭をし、10数畝の土地を持っていた。当時は、1人の職人が数人の工員を連れていて、仕事の規模と状況に応じて、彼らが組を作るのであった。左官の仕事は農閑期にするのが普通で、一般には春節のあと村を出て、旧暦4月の農耕時には帰村した。左官の工賃は当時、職人で一冬110元、泥を煉ったり水運びをする小工で7、80元であった。頭領となった殷鳳山は200元も稼いだという。しかし彼は金を稼ぐのも多かったが、使ってしまう金も使途が曖昧で浪費が多かった。彼の家にはいつも酒瓶が転がっており、尋ねて来るものに酒を飲ませたし、耕作を手伝うものには誰にも金を与えたという。しかも彼の妻は賭博が好きで、村の西に住んだ2人の女に金を巻き上げられていたという。銅鑼会に参加した当時、彼はすでに40歳を越えていた。彼は歌は唱えなかったが、大きなことをいうことが好きで、老劉とも親しかった。村正の陳世昌と一緒にあって、会頭の役を引き受けたのである。もし誰かが騒ぎを起せば、彼が出て行ってたちまち取り仕切ったという。

田玉城：本村の勢力家「田大門」の一族に属す。父は田珍で、所有する土地は6、70畝であった。外に、姻戚関係のあった鄭家が本村に持つ土地30余畝を耕作したので、100畝以上の土地を経営した。田玉城は銅鑼会では女形を演じた。声もよく、唱い方が丁寧だったので女形にはうって付けであった。

王慶雲：3人兄弟の次男。数畝しか土地がなく、良郷の魏家の小作をした。家には古い箆笱が2つあるばかりで、外には何もなかった。左官として働くこともあったが、いわゆる「二把刀」（二流）で細かい細工ができなく、融通も効かなかった。本族の叔父が無錫で県承審の役に任

官したので、無錫についていったことがある。しかし叔父が解任されて、2年も経たないうちに帰ってきた。

韓君：4人兄弟の長男であった。耕地はもちろん、家を建てる敷地もなかった。良郷の魏家の土地を借りて住んだ。彼は結婚できずに一生を過ごした。殷鳳山と付き合いがあり、彼の家によく出入りをした。

張君：2人兄弟の次男。3畝しかなかったが、この土地も担保として出されていた。後に、王慶雲に売られてしまった。未婚のまま一生を過ごした。北京で徒弟となったが、不景気で解雇され、古着を売って歩いた。彼は痩せて力がなかったので、仕事を充分にすることができず、兄の家族と一緒に生活をして糊口をすすいだ。銅鑼会の中では、男役を演じ、武将の役についた。

以上が灯花会の会首と銅鑼会に参加した人々のプロフィールである。まず注目されることは、李魁元、李魁恒の兄弟と田玉城の3人を除いて、参加者はいずれも村で最も貧しい階層に属すということである。

村正の陳世昌が会の設立に大きな役割を果たしている。他村の者を村に住まわせたり、村人に寄付を募ったりするには、村正の許可は不可欠であった。村人の寄付で楽器を購入するために北京に行ったのは、老劉と村正の陳世昌とであった。また、楽器を管理したのは天仙宮であった。冠婚葬祭で使用する仕器が村の共有財産として、天仙宮で管理されるのと同様である。

本村の村正は、長期にわたって陳世昌によって担われた。その期間は、何度か途中の中断はあっても、開放の前30数年間におよんだ。七・七事変（1937年）前後から社会秩序は乱れ、政府や軍隊からはことある毎に臨時税がかけられてくる。税の外に、軍隊の食料、馬の飼料、燃料用の薪から、そして砲台を構築する木材や銅まで村から徴収された。そのたびに役人が派遣されてきて、村は彼らを接待しなければならない。軍隊は武装しているので脅迫的で、軍隊の徴発は村人には土匪と変わらなかった。村正（保長）は、上からの誅救に応じなければならない、応じなければ殴られる。村民からすると割を食った仕事だと見なされていた。村の行政が、顔立ちの暗黙の了解のうちに行われたとはいえ、こうした状況では、公に責任を責められる役に就くことは誰からも敬遠された。

村正はすでに村人の社会的な権威を表すものでなくなっていた（佐々木衛編、1992：213-217）。

しかし誰もなりたがらない村正の仕事を甘んじて受けたところに、陳世昌の村での存在があったにちがいない。銅羅会の会首ともくされたのは、陳世昌と殷鳳山であった。両者とも、村内では「小康」（まずまずの生活）の家とは見なされない。村の社会的階層や威信からすると、周辺にいたと考えられる。彼らが底辺に生きる人々を引き付けて集めていたところに、銅羅会の特徴の一つがあると思われる。

天仙宮の廟会は4月18日に開かれる。銅羅会が芝居を上演することもあった。しかし廟会の主な行事は外のところにあった。娘娘の誕生祭を祝うという名目で、「吃会」が催された。当日は、廟に集まって香を焚き、村の平安無事を祈願をする。吃会にかかる費用は、本来は廟地の収穫から支出されるのだが、廟地はそれをまかなえるだけ大きくはなかった。このため、金持ちが金を出して元手として立て替え、秋の収穫の後、参加者から費用を均分して徴収した。準備された食卓は、6人掛けのテーブルが6組であった。本村の外に、となりの炒米店と夏庄からも参加者があった。本村からは18戸前後の参加者であったという。会を取り仕切ったのは、「田大門」一族の田茂、村の土地持ちであった李桂馨、そして村正の陳世昌であった（佐々木衛編、1992：236-237）。村の権威と威信からすると、秩序はこの吃会に中心があったにちがいない。

灯花会についても、銅羅会と同様な性格を見ることが出来る。会首となった3人は、村人からは「善人」ともくされているとはいえ、階層と威信からすると、村の中心に位置するとは考えられない。こうした周辺にいる男たちが互いの志をつのり、村の行事を組織していることに、彼らの活動の特徴がみえる。灯花会は、苗林、蘇斌、王玉の3人が亡くなると、世話をするものもいなくなり、村を灯花の火で包んだ幻想的な行事も廃れてしまった。

(2) 北京市房山句大柴塢郷肖庄の「小車会」

肖庄でも、元宵節に灯花会を組織した。家屋と屋敷内の隅々に、そして村の辻々に灯花をしてみわった。本村では、村内に3つある廟をまわって、「散灯

花」の儀式をした。まず、村の公所として使われていた姑子廟（庵廟とも呼ばれた）に集まり、保長に先導されて村の北にある北廟（「三教堂」）に行く。北廟では廟の道士が経を念じながら黄紙を燃やし、灯花に火を移す。集まった会衆は、この間ひざまづき、叩頭する。これが終わると、最初の灯花から次々と火を移して、散灯花を始めたのである。次は、村の南の端にあった三官廟にいき、香を焚いて叩頭する。また村の辻に散灯花をして一巡し、村の真ん中にあった姑子廟に帰って来た。姑子廟では、香を焚き叩頭する。最後に爆竹を鳴らして、この行事を終えた。元宵節の祭に花を添えるのが走会であった。本村では「小車会」が組織され、村の辻で演技を演じて観衆の喝采を浴びたのである。しかし本村の小車会は、先の元武屯の銅鑼会と性格が少し異なる。

小車会が組織された経緯には、次のように二つの説明がある。一つは、本村で小車会が組織される以前、走会を見物しに他村まで行っていたが、ある年、纏足をした老婆が雪の中で動けなくなり難儀をした。こうした事件をきっかけに、本村でも走会を組織して村人が楽しむようになったのだという説明である。もう一つは、本村に日本人が経営する工場があり、村人と経営主との間で激しい紛争が起きたことがある。この紛争の頭となったのが、小車会の会首となった李森であった。李森が小車会を組織して、人を集めたという説明である（佐々木衛編、1992：272）。前者は、小車会の参加者の一人が説明したものである。彼の説明を続けると、小車会の活動はまったくの遊びで、単に娯楽のためのものであったという（佐々木衛編、1992：273）。後者は、かつて工場で働き、事件を直接に体験した者の説明であった。しかし彼自身は小車会には参加しなかったし、この事件についてこれ以上の説明を拒んだ（佐々木衛編、1992：272）。組織された時期に関する説明も、1942年頃であったという説明と、1948年であったという説明がある。前者は会首に近い立場の者で、後者は会首の指示に従った者の説明であった（佐々木衛編、1992：272）。こうした不一致は面接者間で互いに確かめ合うことにもなったが、互いに譲らず一致することができなかった。いずれにしても、面接者には我々調査者に語りたくない部分があり、設立当時の複雑な状況を推測させる。

小車会は、参加者が穀物を少しずつ抛出して集め、銅鑼などの道具を買った。準備する費用を、参加しない一般の村人は負担をしていない。「この活動は娯楽なので、当時の保長は関与しなかった。積極的に指示もしなかったが、反対もしなかった。金銭を出して活動を支えることもなかったが、活動に対する責任もなかった」(佐々木衛編、1992 : 274) という説明が、小車会と村との関係をよく表わしていよう。また、彼らが演じるのに保長への報告も承認も必要がなかったといわれている。小車会の活動は、参加者の全く自発的な任意に基づくもので、活動の内容も経費についても保長は関与していない。村の活動とは見なされず、一線を画している。

彼らが演じたのは、この地方で唱われていた「秧歌」であった。秧歌は元来南の地方の田植歌に始まり、やがて北の地方でも演じられるようになったとみられている。農民の娯楽で演じる歌舞形式で、正月に色とりどりの衣装に扮して秧歌を演じる一隊が、村や街を練り歩いてまわる。1年の豊作を祝い、郷里隣家の新陸をはかる(苗晶他、1983 : 35-36) と一般に説明されている。本村の小車会の構成は、「推車」(車を後ろから推す役：父親役)、「拉車」(前で車を引く役：弟役)、「坐車」(車に乗る役、実際には車を肩から吊るして抱える：娘役)、「丑婆子」(そばについて歩いておどける道化：母親役)、「公子」(行列の後ろから付いて歩く金持ちの若旦那)、外に銅鑼を叩いて先導する役、喇叭を吹く役、幡を担ぐ役、などからなった。身振りおかしく踊ったが、一家が婚家に行く道中を表現したもの(『姑娘要陪送』)だと考えられている(佐々木衛編、1992 : 273)。

彼らの一隊は、農閑期になると会首の李森の家に集まって練習を始め、正月に村の中の人々の集まる数カ所で、踊って唱ってまわった。村人の中には、彼らの一隊を取り巻いてついて回るものもあり、その観衆は百人を超えたという。しかし一般には、観衆は彼らの演技を見るだけで、彼らに金銭を出したり特別の慰労をすることもなかった。「一椀の水を飲ましてもらえばそれで十分であった」、「ある家出は茶水や菓子を机に並べて我々の到着を待ってくれたこともあった。こうした家の前では、2度繰り返して踊った」(佐々木衛編、1992 : 273)。

参加したものにとっては、隊を組んで歌を唱い踊って、村中を練り歩くだけで、それで十分楽しかったのであり、観衆も正月の賑わいを満喫することができたのであった。

銅鑼や太鼓の音が響き、村中が熱狂する日にも彼らは活躍した。その一つが、2月2日の「龍台頭」の行事であった。この日は、冬が終わり、蛇（龍）が活動を始めると信じられた。当地では、「2月2、敲鍋底、又有錢、又有米」、あるいは「2月2、敲坑沿、又有銀来、又有錢」という俗語があり、当日は棒で穴を叩いて蛇や蠍を脅かして穴の奥に追いやった。この行事は賑わうほどよいとされているので、小車会の者も銅鑼や太鼓を叩いて村中を歩いた。しかし正月の走会のように、小車会が組織的に唱って踊ったのではなさそうだ。彼らが鳴りものを演じることができるので、銅鑼と太鼓を持って参加したのだと理解され、こうした参加に何らかの要請があったのではない。干ばつになると、雨乞いの祈願をすることがあった。この時も、村中の人々が集まり、銅鑼や太鼓が叩かれる。しかし銅鑼や太鼓が叩け喇叭が吹ける者なら誰でもよく、従って彼らに謝礼を支払うこともなかった。龍台頭も雨乞いも、保長や組長の差配によって行われるのだが、参加は極めて自在なことに注目される。

小車会の参加者はどのような人々であったか、以下のように整理できる（佐々木衛編、1992：273）。

「会首」：李甫と李森の兄弟。李甫は2畝の土地しかなく、古着を売って歩いた。家族は、彼と妻、3人の子供。住んだ家は、2間の泥壁の家屋であった。李森は、叔父の養子となった。8畝半の土地があったが、彼も古着を行商した。家族は3人、家屋は3間の泥壁の建物であった。

「坐車」：王林華（本人の口述）、1畝の土地もなく、住む家もなかった。人の家を借りて住んでいた。家族は、本人と母、2人の妹の4人。農繁期には短工として雇われ、農閑期には炭坑で石炭を担いで金を稼いだ。

「推車」：秦世賢（本人の口述）、家は3間の泥壁の建物であった。家族は母と本人の2人。土地はなく、短工として雇われた。農閑期には炭坑で石炭を担いだ。

「拉車」：李昆（本人の口述）、村で豆腐屋を経営した。土地は16畝あった。当時の家族は、父母、4人の兄と兄嫁、本人からなり、十数人いた。

「丑婆子」：李采章と常志修（本人口述）が扮した。常志修は三教堂の道士をしていた。家は貧しく、三教堂に小僧として出される。李采章は会首の李甫の長男。

「打羅」（銅鑼を打つ）：劉照芳、彼も貧しい。

「打鉢」（鉢を打つ）：趙玉、彼も貧しい。

李甫と李森の呼びかけで、小車会が組織され、正月が近くなると彼らの家に集まって「走会」の練習を始めた。費用は、各自の経済状況に応じて、穀物を拠出し、良郷で金に換えて必要な道具を買い揃えた。衣装は古着を使い、道具などもほとんど自らが作ったので、金はかからなかったという。演じ終わったあと、銅鑼や太鼓をはじめ、使った衣装、鬘は会首が保管し、翌年、また演じるときにこれらを使用した。李甫と李森が万端を準備し、活動の場を提供して、小車会が運営されていたのがうかがえよう。

参加者が、日本人が経営した工場との対立に関与していたのかどうか、彼らは説明を避けている。しかし彼らの家族状況を見ると、いずれの参加者も貧しく、本村の中でも最下層に属する人々であった。彼らの社会的ネットワークがどのようなものであったか、今では知ることができない。下層に滞留していた彼らが、一つの事件を機に彼らの信頼を集めた李甫と李森の周囲に集まって、呼び掛けに呼応したのではないかと推測できる。

肖庄の宗教行事で最も重要と見なされているのは、三教堂（北廟）の6月24日に举行された「吃会」であった。本村の三教堂は北京の白雲観の下院で、当村にもつ6、70畝（かつては3頃であったとされるが、三教堂に住んだ道士が次第に売ってしまった）の土地の管理にその主要な活動があった。三教堂の院内は、道教の神を祭祀する玉皇殿を中心とするが、関帝を祭祀する大殿も配置されていた。当時の「吃会」は、この関帝の誕生を祝う行事である。また「謝秋」とも呼び、収穫の感謝、あるいは降雨の感謝の意を表わしていた。豊饒と平安を祈願する村人の最大の行事であった。

儀式としては、焼香と叩頭をする以外、特別のものはなかったとされる。行事の中心は、参加者が一堂にする会食であった。会食で準備した料理は、「八箇碟、八箇碗」といって豚肉、豆腐、野菜を使ったもので、村で準備した料理としては最も良いものであったという。酒も用意され、この吃会に参加するには費用の分担が必要であった。経費の参加者による均等分割とし、一人当たり数元が必要だった。費用の負担が必要のため、村人の祈願を集めた行事とはいえ、本村の全戸から参加したのではなかった。参加者は20人くらいであった。本村には「十八大家」という言葉がある。必ずしも18戸というのではないが、「有一定財産、地位的」（財産と地位のある家）はほぼ決まっており、彼らしかこうした行事に参加できなかった。「村で何が起きると、保長はこの十八家とまず相談した」という（佐々木衛編、1992：268）。村の活動に主導的な役割を果たす家には、自らと定まる一群があったことを表わしている。

この「十八大家」が村の活動と行事を主導するばかりでなく、社会的威信の中心に位置するにちがいない。彼らと小車会の参加者との比較をすると、小車会の参加者が村の威信の周辺に位置することはいうまでもない。しかし小車会の成員は、小車会を組織して自らの姿を表わすことで、活動の場を生み出し、村の社会生活の中にかかわることを可能としたのである。走会は、正月の賑やかさを演出する上で欠かすことができない。銅鑼と太鼓を打ち鳴らして歌を唱い、おどけた身振りを演じて、村を巡回してまわった。村の行事とは認知されることはなかったが、この時ばかりは、村人たちの衆目を一身に集めることができた。「十八大家」の保持する社会的威信と異質な、一つの社会的勢力を誇示したにちがいない。

4. 小結 —— 演劇集団の活動にみられる華北村落の構造

廟の祭祀と演劇が民衆運動の発展の過程で、人々を結び付け活動を高揚させる役割を果たしたことは、多くの研究者に注目された事実である。本論で紹介した元宵節の灯花会の行事について、三谷孝は、元宵節に玩灯の行列を組んでドラを鳴らし太鼓をたたいて歌舞をしながら練り歩いて、国民党の地方部隊を

欺き一挙にこれを殲滅した事例を紹介している（三谷、1989：132）。しかし以上の二つの村の銅鑼会と小車会の事例のように、祭祀と演劇が人々を結び付け、彼らに一つの集団としての姿を与えたのは、彼らの活動の形態が華北村落の社会構造と密接な関連を持つからに外ならない。

元武屯の銅鑼会と肖庄の小車会は、村との関係でみると異なった様相を持っている。前者は、村の行事の中に取り込まれていて、村人によって費用をまかなわれる村の活動の一環として認知されている。後者は、村の中で演じられ、村人による活動ではあるが、村の組織的な活動として認知されていない。李甫、李森の兄弟が会首となって呼び掛けられた私的な娯楽集団の一つでしかない。しかし組織形態からすると、参加が強制されない、会首を中心に、会首との個人的な関係で集団が構成されている、というところにその共通する特徴を見ることができよう。集団類型からすると、「自発的結社」(voluntary association)ということもできる。だがここでいう銅鑼会も小車会も、血縁的・地縁的集団 (automatic association) の解体した近代社会において成立する近代的集団ではない。当時の華北社会の社会生活を組み立てる基本構造が、本来的にvoluntaryな性格を具有しているのではないかと考える由縁である。

元武屯においても肖庄においても、村の骨格となる構造は銅鑼会や小車会の活動とは別のところにあった。元武屯で最も重要な祭祀は、4月18日に举行された天仙宮の廟会であった。元武屯ばかりでなく、隣村からも参加者を集め、「吃会」を催した。肖庄でも、6月18日に三教堂で「吃会」が催された。村の平安と豊饒とを祈願する祭祀は、村人の祈りが集められたにちがいない。また参加者からすると、両者には村の重立ちが一同に会する機会でもある。社会的な威信は、彼らの参加者の地位の中に凝集する。「十八大家」という呼称は、彼らの存在を無視して村の行事と活動は何事もできない、ということを表わしている。

これに対して、銅鑼を叩くこと、叭喇を吹くことは、村の中では高い評価を得ていない。彼らは葬式の儀式に欠かせないもので、「吹鼓手」には零落した者が多く、彼らのことを語るとき村人は一種の差別を漂わせる。事実、銅鑼会

と小車会の参加者の多くは、村の下層の人達であった。村落の生活のはみ出し者、あるいは周辺に位置する人々であったであろう。しかし彼らでさえ、「善人」や「会首」を中心に活動を組織すれば、村人の衆目を一身に集めることができたのである。スミスが認めたように、中国の村落社会において演劇が村人を熱狂させる力を持っていたとすれば、その主役となった彼らは、大いに「面子」を立てることになったであろう。村落生活のはみ出し者、周辺に位置する者も、銅鑼会や小車会を組織することで、自らの姿を現わし、村落生活の中に自らの位置を持つことができたと解釈できよう。村の最下層にいる彼らが、演劇を上演することで彼らの存在を表現し、村の社会的威信の秩序とは異質の一つの勢力を体現している。そうした秩序の複層性を可能とする構造に、近代華北社会の構造的な特徴の一つを認めることができる。彼らの勢力が、ある条件のもとで既存の威信と秩序を圧倒すれば、それに取って代わりを得ることもある。近代史でたびたび体験した民衆運動のダイナミックな性格は、こうした構造の反映でもあろう。むろん村の中の演劇集団が、すべてこの事例のように、下層に生きた人々によって担われたと結論することが目的ではない。

両村の場合、「吃会」の費用は、参加者の均等分担でまかなわれている。元武屯では、かつては廟地の収穫で費用がまかなわれていた、という報告があった。村としての絆は、もっと強かったという予測も成り立つ。しかし当時は、村での会食は、一族の共有地がない限り（『中国農村慣行調査』巻3：91-92）、参加者の均等な負担によることが一般的であったようだ（『中国農村慣行調査』巻4：413）。費用が参加者による負担となれば、以上に紹介したように、村人がこぞって参加することにはならない。村の顔役や重立ちが会首をつとめて、参加できる者のみに呼びかけるということになる。村の祭祀への参加も、任意性を自ずと高めざるを得ない。彼らは、「十八大家」という呼称があるように、誰からも認められた一つの勢力を形成する。そして、彼らとの相談がなければ、村の活動は何事も進まない。しかし彼らは必ずしも村の制度の中に責任ある地位に就いているとは限らない。元武屯の場合、当時の村正は村人の社会的な権威を体現する者ではなくなっていた。大戸中心の社会秩序と威信の体系が暗黙

の内に出現し（久保田文次、1992：5－6）、秩序や権威の正統性が制度化されないところに、近代華北社会の構造的なもう一つの特徴を見ることができよう。

一方では、社会秩序は複層的な構造を許し、他方では、権威の正統性の制度化が脆弱であったという構造が、銅鑼会や小車会が村の威信の周辺に生きる人々を組織し、社会的勢力の一つとして出現させる可能性を与えた、と考えることができよう。

注

- (1) 本論は『近代華北農村社会における民衆運動に関する総合的研究』というテーマで、1986年から1990年にわたり、文部省科学研究費（国際学術研究）の助成を受けて実施された共同研究の成果の一部である。調査資料は、1991年度の文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けて、1992年2月に『近代中国の社会と民衆文化』（東方書店）として公刊された。資料を取りまとめ本論を執筆できたのは、教育研究学内特別経費を受けた「アジアにおける歴史と文化の諸相」（代表者：畑地正憲）の研究グループのおかげである。また、財松下国際財団から1991年度（前期）に、「中国近代化と社会変動に関する実証的研究」として研究助成金を受けた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

中国農村慣行調査刊行会編

1952－1958 『中国農村慣行調査』全6巻 東京：岩波書店

DUARA, Prasenjit.

1988 CULTURE, POWER, AND THE STATE: Rural North China, 1900－1942.

Stanford University Press, Stanford, California.

久保田文次

1992 地方行政機構と社会秩序

佐々木衛編 『近代中国の社会と民衆文化』所収 (p. p 5 - 6)

東京：東方書店

MIAO, Jing (苗晶) else

1983 『山東民間歌曲論述』 濟南：山東人民出版社

三谷 孝

1989 紅槍会と郷村結合

柴田三千雄 外編 『社会的結合』 東京：岩波書店

佐々木衛

1990 近代華北の親族集団にみられる分化と統合

路遥・佐々木衛編 『中国の家・村・神々』所収 (p. p 27 - 52)

東京：東方書店

佐々木衛編

1992 『近代中国の社会と民衆文化 —— 日中共同研究・華北農村社会調査資料集——』 東京：東方書店

瀬川昌久

1991 『中国人の村落と宗族』 東京：弘文堂

SMITH, Arthr H.

[1899、1968] Village Life in China.

仙波康雄・塩谷安夫訳 1941 『支那の村落生活』 東京：生活社

田中一成

1985 『中国の宗族と演劇』 東京：東京大学出版会

TURNER, Victor

[1974] DRAMAS, FIELDS, AND METAPHORS. Cornell University Press

梶原景昭訳 1981 『象徴と社会』 東京：紀伊国屋書店

内山雅生

1990 『中国華北農村経済研究序説』 (非売品) 金沢：金沢大学経済学部